

ヤコブソンとナボコフの確執をめぐって —象, イーゴリ, スパイ—

沼野充義

ヤコブソン星座と「学園伝説」の洗礼

この文章は扱う主題の性格からいって、アカデミックな論証には馴染まない部分があるので、論文を書いている振りをするのはやめて、個人的な思い出から始めることをお許しいただきたい。1981 年秋、私がフルブライト奨学生としてアメリカに留学する機会を与えられたとき、ハーバード大学を選んだことは、ロマン・ヤコブソンの存在と無縁ではなかった。ヤコブソンは当時まだ存命だったとはいえ、もう 80 代半ばの高齢である。彼がハーバードで現職の教師として教鞭を執っていたのははるか昔のことで、故木村彰一先生のようにヤコブソンの「講筵に列な」¹ ることなど、叶わぬ夢とは知っていたのだが、それでもハーバード・ヤードやケンブリッジの町を歩いていけば、ひょいとこの伝説的の大学の姿を見かけることくらいあるのではないかと、薄々期待はしていたのだ。実際、その後 4 年にわたったハーバード生活の中で、スラヴ関係の学者では、すでに退職して久しかったキリル・タラノフスキーやヴィクトル・ワイントラプにも会って、話さえ聞く機会もあったのだが、ヤコブソンは私が渡米してから一年もたたない 1982 年 7 月 18 日に逝去し、言葉を交わす機会は一度もないまま終わった。

ハーバードでヤコブソンは 1949 年にスラヴ語スラヴ文学科の教授として迎えられ、1965 年に退職して名誉教授となるまで教え続けた。さらにハーバードと同じマサチューセッツ州ケンブリッジにある MIT [マサチューセッツ工科大学] でも 1957 年から客員教

¹ 木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』岩波文庫、1983 年、214 頁。木村先生がヤコブソンの授業に出席していたのは 1954 年春のことだという。そのときヤコブソン自身から贈られた *La Geste du Prince Igor* (『イーゴリ公武勲詩』) の「手沢本」を、木村先生は自分の翻訳の底本としている。なお、本稿ではこの作品を神西清の訳に従って『イーゴリ軍記』と呼ぶことにする。翻訳は木村訳のほうが圧倒的に学術的に正確ではあるが、タイトルとしてはシンプルで語呂のよい『イーゴリ軍記』を取った。なおヤコブソンによる校訂本の詳細な書誌は以下の通り。*La Geste du prince Igor, épopée russe du XIIIe siècle, texte établi, traduit et commenté sous la direction d'Henri Grégoire, de Roman Jakobson et de Marc Szeftel, assistés de J. A. Joffe*. Annuaire de l'Institut de philologie et d'histoire orientales et slaves, t. VIII (New York: École libre des hautes études, 1948). 本書の内容は、ヤコブソンの *Selected Writings IV* (The Hague: Mouton, 1966) に再録されている。

授を兼務し、その身分は1970年にやはり名誉教授となるまで続いた。亡くなった1982年の11月12日には大規模な追悼会がMITのクレスギ講堂で行われることになったので、私も勇んで聞きに行ったことを覚えている。確かプログラムには、ノーム・チョムスキーやソ連の記号学者・言語学者ヴァチェスラフ・イワノフなどの名前もあり、彼らの姿が見られると思っただけでも興奮したのだが、なぜか二人とも会場に来ることはなかった。まだソ連時代のことで、イワノフは出国の許可が間に合わなかったらしいという説明を会場で誰かから聞いた覚えがある。チョムスキーについては事情は分からなかった。チョムスキーは同じ「言語学」で括れるかもわからないほどヤコブソンとは違うことをやっていたとはいえ、ヤコブソンとは同じケンブリッジを拠点にする世界的言語学者どうし、尊敬しあい、付き合いもあったはずなので、追悼会に来てもちろんおかしくなかった。ロバート・バースキーのチョムスキー伝によれば、二人がハーバードで初めて会ったのは1951年のことで、後にチョムスキー自身はヤコブソンについて、彼はチョムスキーのやっている「どんなことについても、これっぽっちも関心も理解も示さなかった」と回想しているという。² これもまたすごい話だが——というのも、周知のようにヤコブソンの関心の範囲は驚異的に広く、“*Linguista sum; linguistici nihil a me alienum puto*” (われは言語学者なり。言語に関するものでわれに無縁と見なすようなものは何もない)³ を自らのモットーとして宣言したくらいなので、その彼がチョムスキーの言語学を無縁だと思っていたのだとしたら、これはよっぽどのことではないか！——それでもこの二人はヤコブソンが亡くなるまで友人であり続けたという。

クレスギ講堂で行われた追悼会の内容は、翌年、当日のスピーチとその他内外から寄せられた故人を称える弔辞とともに小冊子となった。⁴ 今回この本を久しぶりに手にとって驚いたのは、内外から寄せられた弔辞や回想を集めた第2部の冒頭に、ゲンナジー・アイギの詩が置かれているということだった。アイギはロシア・アバンギャルドの流れを汲むチュヴァシ人の前衛詩人だが、旧ソ連体制下では詩人としては全くと言っていいほど認められていなかった。その彼が1966年に、モスクワのウクライナ・ホテルで訪ソ中のヤコブソンに会っていたということがこの詩からは推測できる。私自身は、詩人たなかあきみつ氏のお陰でアイギの詩に興味を持ったのが1990年代半ばのことで、アイギとは個人的にも知り合って二度日本に招待する機会を作り、2006年にモスクワで彼が病没する直前に病院に見舞いに行ったほどの縁だったのだが、ついぞ、彼がヤコブソンとどこかで接点を持っていたと思いだることもなかった。もしも思い当たっていれば、若き日のアイギ

² Robert F. Barsky, *Noam Chomsky: A Life of Dissent* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1998), p. 81.

³ 1952年、インディアナ大学で行われた人類学者・言語学会議の結語から。Roman Jakobson, *Selected Writings II* (The Hague: Mouton, 1971), p. 555.

⁴ *A Tribute to Roman Jakobson* (Berlin and New York: de Gruyter, 1983).

がヤコブソンとどんな話をしたのか、生前彼に聞いていたのに、と悔やまれる。私の想像では、たぶんこの二人は共通のインスピレーションの源であったマヤコフスキーについて熱く語り合ったのではないだろうか。それに加えて、ヤコブソンは彼にチュヴァシ語の詩の韻律について聞いたかもしれない。私は30年以上前にも *A Tribute to Roman Jakobson* を手に取っていたのだから、そこにアイギの名前を見ていたはずなのだが、まったく覚えていないのは、当時まだアイギの名前が私にとって何も意味しなかったということなのだろう。

ヤコブソン周辺の人たちについての脱線が続いてなかなか本題に入れないのだが、これもまたヤコブソンという巨大な「星座」ゆえの必然だろうか。 *A Tribute to Roman Jakobson* の序文で MIT の学長ポール・グレイが言っているように、彼は偉大な星というよりは、世界中の数えきれない人々の針路を決めた一大星座だったのだから。ともあれ、話をハーバードに戻せば、私は生前のヤコブソンには会うことはできなかったのだが、キャンパスではまず有名な「象」の洗礼を受けた。「象」と言っただけで、ハーバードのスラヴ関係者なら、誰でもすぐにピンと来る逸話である。大学院の上級生から聞いたのか、あるいは当時まだ若手の新米教員だったヴラジーミル・アレクサンドロフに教えられたのか——いずれにせよ、それは都市伝説ならぬ、一種の「学園伝説」として流布していたのである。

当時、私が耳で聞いた「象」の逸話とは、おおむねこんな内容だ。あるときハーバードのスラヴ科で、ナボコフを教授として採用しようという話が持ち上がった。賛成する人も多かったのだが、当時、ハーバードのスラヴ科ですでに教えていたヤコブソンが強硬に反対した。「皆さん、ナボコフが作家であることは認めましょう。しかし、〈象学〉の教授として、本物の象を呼ぼうなんてバカな話がどこにありますか？」鋭い機知に富んだヤコブソンの舌鋒に太刀打ちできる人はなく、ナボコフがハーバード大学教授になる可能性は潰えてしまった……。

この学園伝説はいまでも生きているようだ。「Nabokov, Jakobson, elephant」といったキーワードでインターネットを検索すると、相当数の関連文献にヒットし、その中には『ハーバード・クリムゾン』という学生新聞に掲載された、かなり本格的な記事もある。⁵ しかし、これはもちろん単なる伝説ではない。ヤコブソンとナボコフの間には、実際に複雑な確執と対立があった。ただし、その実態がどのようなものであったかは、いまだによく分からない面も多い。本稿は、この二人のロシア出身の亡命者——それこそどちらも「象」に譬えられてもおかしくない二人の巨人——の関係を探る試みである。単なるゴシップの詮索ではないので、できるだけ文献に基づいて論を進めるが、その際の私の関心は、学問

⁵ Victoria A. Baena, "Past Tense: Nabokov and Jakobson," *The Harvard Crimson*, October 4, 2012.

的というよりはむしろ「人間的」なものだということはお断りしておく。⁶

「動物学の教授には象を呼べ！」

「象」の話は、口承のアネクドートのようなものなので、正しい一つのカノニカルなテキストがあるわけではない。口承で伝わっていく過程で、尾ひれがついたり、変形したりすることもありうる。しかし、その原型はどんなものだったのか。実際にヤコブソンがそのような発言をする場があったのか。

「象」の逸話を最初にテキスト上に固定した広く知られる著作は、英語圏の初期のナボコフ研究者アンドルー・フィールドによる伝記であろう。⁷ フィールドの著作は不正確な箇所が多く、最初は原稿を読んで訂正を申し入れていたナボコフ自身の好意にもかかわらず、フィールドは自分の無根拠な憶測に固執し続けてナボコフを激怒させ、二人の関係は完全に決裂した。そんなわけで、はるかに正確で包括的なブライアン・ボイドによる伝記が出版された後、フィールドの著作はナボコフの伝記研究としてはほとんど意味を失ったのだが、フィールドは独自の文体を駆使して、いわば半ば創作のようにナボコフ像を描き出しているため、むしろ「伝説」がどのように受け止められ、創作の素材として利用されたかを探るためには興味深い資料となる。

フィールドの記述をかいつまんで紹介すれば(1977年の *Nabokov: His Life in Part* と1986年の *VN: The Life and Art of Vladimir Nabokov* の間には書き方に違いはあるものの、内容はほぼ同じである)、ハーバードでは1946年に、ナボコフを比較文学・スラヴ文学の教授として採用しようという話がほぼ決まりかけていた。そんなある日、ケンブリッジで彼はイタリア人の比較文学者で特にロシア文学に詳しいレナート・ポッジョーリの訪問を受け、一晩楽しく談笑した。そして、その翌日、ナボコフは自分に与えられるべきポストを他ならぬこのポッジョーリに奪われてしまったことを知らされる。じつはその前にヤコブソンが声高にナボコフ採用に反対する意見を述べて、選考委員会を説得してしまっていたのだ。ヤコブソンは持ち前の豊かにロシア風の英語で、辛辣にこう言ったという。「紳士の皆さん、仮に彼が重要な作家だと認めたとしても、だからといって動物学の教授に象を呼べなんてことになりますか？」(“Gentlemen, even if one allows that he is an important writer,

⁶ なお本稿執筆に当たっては、Donald Fanger (ハーバード大学名誉教授)、Olga T. Yokoyama (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授)、Brent Vine (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授)、Vladimir Alexandrov (イェール大学教授)の各氏から貴重なご教示をいただいた。学問とはあまり関係のなさそうに見えるトリヴィアルな事柄について執拗に問い合わせる私のEメールに快く答えてくださったことに、感謝いたします。

⁷ Andrew Field, *Nabokov: His Life in Part* (New York: The Viking Press, 1977) およびその増補改訂版 Andrew Field, *VN: The Life and Art of Vladimir Nabokov* (New York: Crown Publishers, 1986).

are we next to invite an elephant to be Professor of Zoology?")⁸

1977年刊 *Nabokov: His Life in Part* は285ページあるかなりの大著だが、注も文献目録も索引もついていないため、この有名な「象」発言の出典もわからない。しかし1986年刊のVNには「この情報源はハーバード大学のリチャード・パイプス教授である」という注が新たに添えられた（パイプスはロシア史の高名な専門家）。もちろんパイプスがそんなことをどこかに書いているわけではないので、フィールドの取材に応じて彼が言ったことなのだろうか、単に彼の発言がキャンパスに流布していたただけなのか。

事実関係について言えば、より詳しく正確なボイドによる伝記と比べれば一目瞭然だが、フィールドの記述には根本的な間違いがある。確かにポッジョーリは1947年にハーバードの教授に迎えられているが、それがナボコフのあてにしていた、そしてナボコフが占めることをヤコブソンが反対したポストであったとは考えられないからだ。フィールドはナボコフ招聘人事が起こったのが1946年のこととしているが、ヤコブソンがハーバードの教授になったのは1949年のことであり、その3年も前にナボコフの人事を潰せるような発言権をハーバードで持っていたということはあり得ない。

それではボイドの伝記によれば、この辺の経緯はどう記述されているだろうか。これもまた簡略に要約すれば、おおよそ次のようになる。1957年頃のこと、当時教鞭を執っていたコーネル大学に不満であったナボコフに、ハーバード移籍の転機が訪れる。当時のハーバードの芸術学部長マクジョージ・バンディは、すべての学科長に、「あまりに才能の幅が広くて、伝統的な学科の枠組みにうまく当てはまらず、それゆえ見逃されてしまうような人材で、採用したい候補」がいたら、希望を出すように、とうながした。それに応えて、近代語学科長であった比較文学者ハリー・レヴィンは、もともとナボコフの才能をいち早く認めて高く評価していただけに、彼を採りたいと考え、スラヴ語科の亡命ロシア人、カルボヴィッチ教授（歴史学者）も説得したうえで、ナボコフを推薦することにした。バンディ学科長はこの推薦を認め、改めてこの人事案件を近代語学科で検討するよう求めた。ということは、学科レベルでの会議で承認されれば、ナボコフはハーバードの教授になっていたということだろう。この後はボイドの記述をそのまま引用する。「そこで、ハーバード・スラヴ一座のスター役者であったロマン・ヤコブソンは、他の誰かに主役の座を奪われることを恐れてこの人事に頑強に反対し、ドストエフスキーや他のロシアの大家たちについて風変わりな考えを持っているとしてナボコフを攻撃した。ナボコフを擁護する者たちが、それでもナボコフ自身は卓越した小説家ではないか、と問い返したところ、ヤコブソンはこう答えた——『紳士の皆さん、仮に彼が重要な作家だと認めたとしても、だか

⁸ Field, *Nabokov*, p. 263. この箇所の原文はすべて太字で強調されている。後のField, VN, p. 238では引用は太字になっておらず、また「動物学の教授」の部分には大文字は使われていないが、文言自体はまったく同一である。

らとって動物学の教授に象を呼べなんてことになりますか?』⁹

事実在即して客観的な記述を心がけているボイドだが、この箇所に関する限り、ヤコブソンについて「主役を奪われることを恐れる」「ハーバード・スラヴ一座のスター役者」などという、辛辣な書き方をしている、バランスを失っているように見える。またもう一つ興味深いことに、「象」をめぐるヤコブソンの文言は、フィールドが挙げている文言とぴったり一致している。ボイドは注でこの言葉の典拠として、レヴィン夫人のナボコフ夫人宛の手紙（1957年2月20日付、モントルーのウラジーミル・ナボコフ・アーカイヴ所蔵、未公刊）、BBCで1982年に放送された“VN: The Great Enchanter”というドキュメンタリー番組におけるハリー・レヴィンの発言、そして他ならぬフィールドの本の3点を挙げており、¹⁰ 私は前2点は現時点では参照できないままなので、以下は推測でしかないのだが、ヤコブソンの発言がフィールドの本の引用と一言一句（句読法まで）一致していることから考えて、ボイドはこの発言に関する限り、自分が手厳しく非難している当のフィールドの本からそのまま拝借しているようだ。

しかし、先述したように、フィールドは自分が情報源としたのはリチャード・パイプスだというのだから、要するにヤコブソンの発言は、不明の現発言→パイプス→フィールド→ボイド、といった具合に受け継がれてきたことになる。このように人から人へと受け渡されてきた一種のフォークロアである以上、ヤコブソンの実際の発言を正確に再現することは難しい（ボイドだけが閲覧を許された上記未公刊書簡について憶測をたくましくしてもいけないのだが、レヴィン夫人エレナのナボコフ夫人ヴェーラ宛の手紙には、夫同士が親しい関係にあっただけに、どうしてナボコフ招聘人事がだめになってしまったかについての、内情が多少は書いてあるのではないかという気がするが、おそらくここにもヤコブソンの言葉の正確な再現は期待できないのではないか）。

いずれにせよ、この類のことをヤコブソンが実際に言ったということは事実なのだろう。実際の文言が多少違っていても、ヤコブソンの機知と雄弁の才能から考えれば、これはいかにも彼が当意即妙に、大いに説得力を持って言いそうなことではある。それからもう一つ、考慮に入れなければならないのは、アメリカで流行っていた「エレファント・ジョーク」というものだ。これは象を主人公として、不条理な問答形式で語るジョークのジャンルで、1960年代前半に流行し始めた¹¹ というのだから、1957年のヤコブソンの発言がこういったアメリカ的なジョークのジャンルを意識したものであるはずはないが、彼の言葉が、後のエレファント・ジョークの流行の中でしかるべき場所を与えられ、フォー

⁹ Brian Boyd, *Vladimir Nabokov: The American Years* (Princeton: Princeton University Press, 1991), p. 303.

¹⁰ *Ibid.*, p. 698.

¹¹ Ed Cray and Marilyn Eisenberg Herzog, “The Absurd Elephant: A Recent Riddle Fad,” *Western Folklore*, Vol. 26, No. 1 (Jan. 1967), pp. 27-36.

クロア的な「学園伝説」として受け継がれる下地となったとは考えられるだろう。

『イーゴリ軍記』めぐる——愛国心か、芸術か

それにしても、どうしてヤコブソンはそれほど強硬にナボコフ招聘人事に反対したのだろうか。ナボコフ—ヤコブソンの対立においては明らかにナボコフの肩を持っているポイドは、その理由をヤコブソンの個人的なライバル意識や嫉妬に帰しているように見える。確かにそういう「人間的」な面はあっただろう。この二人はそれぞれが人並み外れた巨大な才能を持った「スター」だった。両雄並び立たず。小さなスラヴ科にこの二人が同居している図は、実際、想像し難い。とは言うものの、かたや厳密な科学を実践する言語学者、かたや美を追求する小説家、二人のやっていることは基本的に違うのだから、衝突しないで共存することはできなかつたのだろうか。

そもそも、ヤコブソンの「象」発言だが、ライバルを蹴落とすための悪意に満ちた皮肉とのみこれを捉えてしまったら、ヤコブソンをあまりに矮小化してしまうことになる。ウィットが強すぎて、真面目に受け止めにくくなってしまった嫌いはあるのだが、アカデミックな研究の立場からすれば、ヤコブソンの言わんとしていることは正論である。優れた作家がそのまま、優れた文学研究者であるわけではないというのは、象が象学の優れた研究者（研究象？）ではないのと同じことであって、一般論としては当然ではないか。しかし、ここでただちに浮かび上がってくるのは、「文学研究」がはたしてそれほど截然と「文学そのもの」から切り離せるのか、という原理的な疑問である。¹²

また、20世紀半ば頃のアメリカでは、現在我々がアカデミックなものを見なすような人文研究の制度がまだ確立しておらず、ヨーロッパから来た優れた文人が、博士号を持っていなくても教授となったケースがしばしばあった。ポーランドの詩人、チェスワフ・ミウオシュはカリフォルニア大学バークレー校の教授になったし、ハーバード・イェンチン研究所所長としてアメリカにおける日本学の基礎を築いたセルゲイ・エリセーエフは、明治時代に東大で訓練を受けた学歴はあったが、博士号も、欧米でアカデミックな研究成果として評価されるような業績もほとんどなく、気質からいえば学者というよりは、芸術を愛好する文人に近かった。そしてヤコブソンがはからずも投げかけた問いは、現代にもまた反響している。20世紀後半、特に末になると、アメリカでは多くの大学にクリエイティブ・ライティング creative writing を教える「創作科」が開設され、研究者とは言えない作家や詩人たちが教えるようになってきたからだ。創作を大学で教えることの歴史と現状に

¹² この点については、以前、東京大学文学部でいま文学を教えることの意味をめぐる、以下の拙文でもう少し詳しく論じたことがある。沼野充義「新しい世界文学と向き合うために」、東京大学編『学問の扉—東京大学は挑戦する』講談社、2007年、44-54頁。

については、まさにヤコブソンの発言を引き取って『象が教える』と題された研究書まで出版されている。¹³

もちろん、ハーバードのポストは「創作」を教えるためのものではなかったから、ヤコブソンの主張はそれ自体理解できないものではない。彼が当時何を考えて「象を呼ぶ」ことに反対したのかを推測するために役に立つのは、中世ロシア史の専門家、マルク・シェフテル (Marc Szeftel, 1902-85) の残した証言である。シェフテルは旧ロシア帝国、現在ウクライナ領のスタロコンスタンチノフに生まれたユダヤ人で、ベルギーで学位を取り、ナチスドイツを逃れて最終的にはアメリカにわたり、1945年から1961年にかけてコーネル大学で歴史を教えていたため、ナボコフとは同じ大学の同僚として親しい関係にあった。ナボコフの長編『プニン』の主人公チモフェイ・プニンのモデルになったとも言われている。

その一方で、シェフテルはヤコブソンとも親しく、1948年にフランス語で出版された *La Geste du Prince Igor* (正確な書誌は注1を参照) には、ヤコブソンの共同研究者として参加している。これは『イーゴリ軍記』の校訂テキスト、詳細な注と論考を集めたもので、ヤコブソンとアンリ・グレゴワールとシェフテルの3人の共同作業の成果だった。以下、ナボコフーシェフテルーヤコブソンの『イーゴリ軍記』をめぐる関係については、『プニン』のモデルとしてのシェフテルに焦点を合わせたガーリヤ・ディメントの研究書『プニニアダ』¹⁴ が、未公刊のアーカイヴ資料を駆使していて詳しいので、主としてそれに基づいて略述する。

当初、ナボコフとヤコブソンの間には接点はあまりなく、親しい関係にたつとは言えないが、ナボコフが『イーゴリ軍記』に興味を持っており、この作品を高く評価していることをシェフテルから聞いたヤコブソンは、ナボコフに *La Geste* の書評を *The American Anthropologist* という学術誌の1949年春号に書いてくれないかと打診し、ナボコフはそれをいったん引き受けた。ヤコブソンはナボコフが承諾したことを聞いて大変喜び、1948年12月15日の締め切りが近くなると、ナボコフがちゃんと締め切りまでに書評を書いてくれそうだろうか、わざわざシェフテルに問い合わせているほどである。ところがナボコフは原稿料無しで学術誌に書評を提供することが惜しくなったらしく、ヤコブソンには無断で *The New Yorker* や *The Partisan Review* といった商業誌に掲載を打診してしまった (しかし、書評の商業誌掲載は結局失敗に終わり、書評原稿自体がどうも宙に浮いてしまったようだ)。経済的に不安定な亡命作家としては、しかたのない選択であったかもしれないが、この振る舞いを見る限り、あまり道義的に褒められたものではなく、ナボコフーヤ

¹³ D. G. Myers, *The Elephants Teach: Creative Writing Since 1880* (Chicago: The University of Chicago Press, 2006).

¹⁴ Galya Diment, *Pniniad: Vladimir Nabokov and Marc Szeftel* (Seattle: The University of Washington Press, 1997), 特に 31-41 ページ。

コブソン関係の危うさを最初から予感させるものになった。

ほぼ同じころ、ヤコブソンとシェフテルとナボコフは、3人で新たに『イーゴリ軍記』の英語版を共同で出す合意をしていた。『イーゴリ軍記』の英訳は、戦前ハーバードの斯拉ヴ科で教えていたサミュエル・ハザード・クロスによるものが既にあったが、ナボコフはそれにいたく不満で、コーネル大学の授業で使うために応急で自分の訳を作っていた。彼としてはそれを推敲してよりよい翻訳を完成させたかったので、3人の共編書では、ヤコブソンとシェフテルが注釈を担当するのに対して、ナボコフが新たな英訳を提供することになった。出版については、ヤコブソンの要望に応じて、ボリンゲン・ファンデーションが引き受けてくれた。当初、ボリンゲンは3人を対等な共編者と見なして、同額の原稿料を3人に支払うと申し出たのだが、ヤコブソンがそれでは翻訳をするナボコフに悪いと考え、彼のために増額を要求した。その結果、1953年7月には契約が成立し、ナボコフが1000ドル、ヤコブソンとシェフテルが500ドルずつ受け取る約束になった。このように見てくると、理想的な役割分担になっていて、その上、ヤコブソンがナボコフとの共同作業を喜び、ずいぶん彼に気を使っていることが分かるだろう。ところが、その後、ナボコフは異様な多忙が続き、翻訳は何年かかってもなかなか完成しなかった。ナボコフの伝記を確認すれば、ちょうど1953年頃には『ロリータ』を完成させ、それが1955年にパリで刊行されるとセンセーションを巻き起こし、ナボコフは一躍時の人になったのである。また『エヴゲニー・オネーギン』に関する詳細極まりない注釈と英訳に本格的に取り組んだのも1952年頃のことで、この巨大な仕事にはそれからまる5年を費やすことになった。このように多忙な日々の中、『イーゴリ軍記』英訳が後回しにされてしまったのも、無理のないことだった。ナボコフ、ヤコブソン、シェフテルによる共同出版の計画はそのまま棚ざらしにされ続けた。

そして、1957年頃のこと。ボイドが既に詳細に記述しているような、ナボコフを教授として迎えようという話が、ハーバードで持ち上がった。しかしヤコブソンは、ナボコフを作家としては尊敬していたものの、そのポストにはフセヴォロド・セチカリョフ(1914-98)がより相応しいと考えていた。セチカリョフは日本ではあまり知られていない、地味な亡命ロシア人学者だが、ドイツで学位をとったヨーロッパ的教養の深いポリグロットである。じつは彼はハーバード留学時代、私が深く敬愛した碩学であり、その学識の深さに驚くべきものがあつたことは、私自身よく知っており、彼がハーバードの教授であることは私には当然のことのように思えた。

ナボコフ採用にはハーバードの斯拉ヴ科のもう一人の有力教授、ミハイル・カルポヴィチもまた積極的ではなかった。ヤコブソンもカルポヴィチも、新規採用のポストには、博士号を持ったアカデミックな研究者、つまりセチカリョフのような学者を迎えたいと考えたのである。それに対して、ナボコフを強く推していた比較文学者のハリー・レヴィンが、

でもナボコフは偉大な作家ですよと主張したところ、ヤコブソンの「象」発言が出たのだった。しかし、シェフテルが日記に書き留めた言葉は、少しだけ違っていて、こうなっていた——「私は確かに象を非常に尊敬していますが、だからといって、動物学教授のポストを与えたりしますか？」（“I do respect very much the elephant, but would you give him the chair of zoology?”）¹⁵ セチカリョフは実際、1957年にハーバードに准教授として採用されているので、ナボコフの代りにセチカリョフがハーバードに採られたと考えるのは、時期的には辻褄があう。ただし、既に述べたように、セチカリョフは篤実なロシア文学研究者であって、当時のハーバードの芸術学部長が求めたような「あまりに才能の幅が広くて、伝統的な学科の枠組みにうまく当てはまらず、それゆえ見逃されてしまうような人材」とはどう考えていられないので、その点から見れば、彼がナボコフの代りに採用されたという説明にはちょっと無理があるようにも思う。

ナボコフの代りに採られたのが誰であったのかという詮索はさておき、自分のハーバード就職を他ならぬヤコブソンが持ち前の雄弁によって阻止したということ、ナボコフは親しかった（そして彼を呼びたかった）ハリー・レヴィンから聞かされたのではないかと。そう考えれば、ナボコフがヤコブソンに突然送りつけた、1957年4月14日付の手紙がどうして書かれたかよくわかる。「自分の良心に照らしてじっくり考え直してみた結果、企画中の『イーゴリ軍記』の英語版について、これ以上協力することはできないという結論になりました。率直なところ、全体主義国へのあなたの度々の小旅行が——たとえ学術的な目的のものだとしても——私には我慢できません。」¹⁶

これは1948年頃始まったほとんど十年越しの共同作業の打ち切りの宣言であると同時に、事実上の絶交宣言だった。そしてナボコフは、1960年に、自分自身の詳細な解説と注釈を添えて、単独で『イーゴリ軍記』英訳の刊行に踏み切った。¹⁷ ナボコフの英訳は、かなりの程度、ヤコブソンやシェフテルの注釈や本文校訂に負っているはずなのに、彼らに対する謝辞はこの本にはない。一方、ヤコブソン、シェフテルの共同作業による新たな注釈を添えた『イーゴリ軍記』は、ナボコフを欠いたまま、ついに日の目を見ることはなかった。

このように記述してしまえば、自分の教授採用を阻止したヤコブソンに対してナボコフが、『イーゴリ軍記』によって単に意趣返しをしたとも見えてしまうが、ことはそれほど単純ではない。もともとこの二人の間には、『イーゴリ軍記』をめぐる——二人ともこの

¹⁵ Diment, *Pniniad*, p. 39. この引用は、シェフテルの未公開の日記（1961年以降シェフテルが教鞭を執ったシアトルのワシントン大学アーカイヴ所蔵）の1971年11月29日の記載から（Diment, *Pniniad*, p. 166）。この言葉をシェフテルはヤコブソン本人から聞いている可能性があるが、これもまた、だいぶ後になってからの回想なので、文字通りの正確な再現であるという保証はない。

¹⁶ Vladimir Nabokov, *Selected Letters, 1940-1977* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1989), p. 216.

¹⁷ *The Song of Igor's Campaign*. Translated by Vladimir Nabokov (New York: Vintage, 1960).

作品を非常に高く評価するという点については一致していたのに——かなり深刻な考え方の違いがあったと思われるのであり、「象」問題が仮に無かったとしても、共同作業はいずれ破綻していたかもしれないのだ。

その問題を本格的に論ずるためには、結局のところ、『イーゴリ軍記』のテキストと中世ロシア史の背景について専門的に分析できる能力が必要で、とうてい筆者の任ではないのだが、ここまでヤコブソン—ナボコフ問題を考えてきた以上、表層的にでも基本的な対立を描くことを試みておきたい。¹⁸ 『イーゴリ軍記』の成立は12世紀末と推定されているが、オリジナルのテキストは現存せず、18世紀末に発見された後代の写本もナポレオン戦争の際の大火で焼失し、結局残ったのは、1800年に公刊および筆写された二種類のテキストだけである。オリジナル・テキストが伝わらず、テキスト発見と消失の経緯が特異であるうえ、中世ロシア文学に類を見ない、いわば孤絶した傑作であるため、古くから、贋作説——つまり、後世の（おそらく18世紀の）誰かが、巧妙に中世の作品に見せかけて作った偽物ではないか、という説が繰り返し出されてきた。20世紀初頭からこの贋作説を精力的に追求し、強力な論陣を張ったのが、フランスのスラヴ学者、アンドレ・マゾン（1881-1967）である。さらに後、1960年代になってからだが、ソ連の歴史学者アレクサンドル・ジミン（1920-80）までもが、この贋作説陣営に加わった。この真贋論争は、現代のロシア文献学の常識では、真作説に軍配が上がり、贋作説はほぼ完全に退けられているが、それでもさらにだいぶ後になってから、やはりハーバードの歴史学者エドワード・キーナンが新たな贋作説を発表しており、いまだにホットな話題であり続けていると言ってもいいだろう。キーナンは『ヨゼフ・ドブロフスキーと「イーゴリ軍記」』という500ページを超える巨大な研究書¹⁹のまるまる一冊を費やして緻密極まりない文献考証を行い、『イーゴリ軍記』が18世紀末にチェコの学者ヨゼフ・ドブロフスキーによって贋作されたものだという新説を提唱したのである。

話をキーナンの本から再び半世紀ほど前に戻せば、ヤコブソンが『イーゴリ軍記』の研究に取り組んでいた第二次世界大戦末期から直後にかけての時期、彼の情熱は、マゾンに代表される贋作説を粉碎することに向けられており、実際、*La Geste*に掲載されたヤコブソンの論考のかなりの紙幅は、マゾンに反駁して『イーゴリ軍記』が真正なものであると証明することに費やされている。しかし、ことは文献学的な探索の次元にはとどまらない。中世ロシアの宝ともいべき傑作が、「偽物」であると、しかも外国人に決めつけられては、ロシア人の愛国心が黙っていられなくなった、といった趣がどうもこの真贋論争には

¹⁸ 『イーゴリ軍記』の真贋論争については、以前ごく軽いエッセイではあるが、「存在しない天才的な贋作者」（『麒麟』第8号、1985年）という文章を書いたことがある。沼野充義『スラヴの真空』自由国民社、1993年、256-261頁に再録。

¹⁹ Edward L. Keenan, *Josef Dobrovsky and the Origins of the Igor' Tale* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2004).

ある。ヤコブソン自身は決して国粹主義的な発言をしているわけではないが、全体の流れの中で、彼の仕事はこのような「愛国的」な陣営に加わるようになった。ところが、ナボコフのほうは、どうも作品の真價は二の次と考えていた節がある。つまり彼は作品の持つ芸術的な素晴らしさにより関心があったため、作品の真正さを強力に論証しようとするヤコブソンからはちょっと引くような感じだったのではないだろうか。

1948年に *La Geste* が出版された後、ニューヨークの高等学院で、『イーゴリ軍記』をめぐるシンポジウムが開催され、そこで *La Geste* への寄稿者の一人であるロシア人の亡命歴史学者、ジョージ・ヴェルナツキーがマゾンの説を徹底的に批判したうえで、「フランス人はナポレオン侵攻の際にテキストを破壊しただけでは気がすまずに、今やこの作品を創り出したという栄誉をロシアから奪おうとしているようだ」と述べたという。じつはヴェルナツキーがこの発言をしたニューヨークのシンポジウムには、文芸批評家でロシア文学通のエドモンド・ウィルソンが聴講に来ていて、会場での学者たちの興味深い発言を手紙で、当時親しかったナボコフに伝えている（1948年12月2日付）。²⁰ ナボコフのほうはそれに先立って、1948年11月21日付書簡²¹ でウィルソンに対して、自分は *La Geste* という本をよく知っている、なにしろいま *The American Anthropologist* のために書評を書いているくらいなのだから、と告げたうえで、そこに収録されたヴェルナツキーのエッセイに関して「クワスの愛国心」が感じられると評していたのだが、クワスとは少々野暮ったいロシアの国民的飲料のことだから、自国のものなら何でも褒めようとするような安っぽい愛国心からナボコフは距離を置こうとしていたことが既にうかがえる。その一方で、ナボコフがこの手紙の時点では、ヤコブソンとシェフテルの『イーゴリ軍記』に関する研究は「特にブリリアントだ」と賞賛していることも見落としてはならないだろう。ただし、いずれにせよナボコフにとってより重要なのは、ハーヴェイ・ゴールドブラットが指摘している通り、「あらゆる傑作において重要なのは靈感と芸術」²² だということであって、マゾンがこれを「後世のパステイーシュ」だと決めつけたことにはナボコフはさほど憤慨していなかったようなのである。²³

実際、『イーゴリ軍記』の自らの英訳に寄せたナボコフ自身の解説（序文）を読むと、ナボコフ自身の不思議にアンヴィビヴァレントな態度が浮かび上がってくる。彼はマクファーソンによる（大部分が贋作と疑われる）有名な『オシアン』の例に言及しながら、『イーゴリ軍記』にもオシアン風の表現が見られることを強調する（とはいえ、ナボコフは『イー

²⁰ Simon Karlinsky, ed., *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-71*. Rev. and expanded ed. (Berkeley: University of California Press, 2001), p. 243.

²¹ *ibid.*, p. 241.

²² *The Song of Igor's Campaign*, p. 77.

²³ Harvey Goldblatt, "The Song of Igor's Campaign," in Vladimir Alexandrov, ed., *The Garland Companion to Vladimir Nabokov* (New York and London: Garland Publishing, Inc., 1995), p. 668.

『イーゴリ軍記』がオシアンに真似をしたなどとは主張していない。むしろこれは、マクファーソンが利用した古代の詩の要素が、古代ロシアのものと共通点を持つことを示す、と主張している。²⁴ そしてナボコフは、歴史的な見通しを考えれば、18世紀末に『イーゴリ軍記』が匿名の詩人によって贋作されたとは考えにくいとし、贋作説をいったんはっきり否定するかのように見える。ところが、そのすぐ後で、たとえ贋作の可能性が否定されたとしても、解決すべき非常に不思議な疑念は残る、と言うのだ。ナボコフの考えでは、それはこの作品において、二つのまったく異なった種類の概念が不自然に結合されていることに関わっている。一方では『イーゴリ軍記』は1187年という特別の時に特定の場所で書かれた、政治的・局所的・实际的・ジャーナリスティックな現実を扱っているのに、他方では、この作品はもっと長い時を置いて印象を操作し、メタファーを練り上げなければ書けないような優れた文学作品になっている、というのである。

ナボコフの言い方は少々込み入っていて、分かりいいとはいえないが、一般に偽書として名高いオシアンの名前を出しながら『イーゴリ軍記』の解説を書き進め、結局のところ、12世紀にこのような作品を実際に書くことができた詩人の姿を想像することは難しいと結ぶのだから、贋作説を否定しているようで、完全には否定しておらず、むしろ贋作の可能性に若干の含みを持たせているようにも聞こえる。ナボコフの解説を含む『イーゴリ軍記』英訳が出版されたのは1960年だが、例の「象」事件の後、ヤコブソンへの腹いせから、こんな考え方をするようになったなどと、はたして考えられるものだろうか。次の節で引くシェフテルの日記は確かにそう主張しているが、私はそのように憶測することもまた、芸術家としてのナボコフを矮小化してしまうのではないかと考える。これはもともとのナボコフの芸術観を反映するものであり、1948年頃、ヤコブソンと『イーゴリ軍記』について共同作業を始めようとしたときから、さほど変わってないと考えべきではないだろうか。贋作というわけではないにせよ、実在しない架空の作品を創造することにナボコフ自身が強く惹かれていたことは、ナボコフの他の作品の例からも明らかだろう。ナボコフは長編『賜物』(1952)に、主人公によって書かれたチェルヌイシェフスキーの伝記小説を挿入し、さらに後には架空の詩人の長編詩への注釈からなる特異な構成の長編『青白い炎』(1962)を書いている。『青白い炎』の構想には、『イーゴリ軍記』の英訳と詳細な注釈作成の経験が影を落としていると考えてもいいのではないだろうか。さらに文学作品に詳細な注を付けるという作業については、それ以前に『オネーギン』でナボコフは十分すぎるほどの経験を積んでいる。このように見ると、『イーゴリ軍記』の英訳と詳細な注という作業は、作家ナボコフにとって決してエピソード的なものではなく、むしろ彼本来の芸術観に基づいた創作の本道の中にあることが見えてくるだろう。

²⁴ *The Song of Igor's Campaign*, p. 18.

ナボコフはこのように、贋作説を完全に否定することよりも、むしろ架空の文学作品を浮かび上がらせ、その手法を通じて虚構としての文学作品の持つ芸術性の解明に重点を置いた。このような芸術家的姿勢は、ヤコブソンにとっては、作品の真贋を曖昧にする、受け入れがたいものだったに違いない。『イーゴリ軍記』をめぐる生じた二人の間の確執は、結局のところ、愛国心と国民的アイデンティティの問題に関わるとともに、科学者と芸術家という二つの相いれない立場の違いを浮き彫りにするものだった。²⁵

若き日のヤコブソンの謎、あるいは「ソ連のスパイ」説

二人の対立はこれで終わらず、さらにきな臭い問題につながっていった。「象」事件に対するナボコフの怒りとその結果彼がヤコブソンに対して抱いた憎悪は——ナボコフの側にそういう感情が生じたと思像しても無理ではないだろう——さらに、ナボコフを駆り立てて、「ヤコブソンはロシアのスパイだ」といった類のことを言いふらさせる事態に至った。この件については、シェフテルの日記がはっきりと記録している。

その結果は、N [ナボコフ] のヤコブソンに対する激しい憎悪だった……。憎しみはあまりに激しく、当時英語版を三人で準備していた『イーゴリ軍記』に関する共同の仕事を全面的に取り消し、ヤコブソンのことは『ボリシェヴィキのスパイ』としか呼ばなくなってしまった。これは非常に不愉快な言動であると同時に、J [ヤコブソン] にとって危険なことだった（ジョゼフ・マッカーシーの時代だったのだ）。N は厳格な非妥協的態度から、ソ連には決して行こうとしなかったが、J は何度か、学術的な目的でソ連に短期で行っていた。しかし、N がこんな形容を少しでも本気で使っていたなどとは信じられない。これは復讐だった、明らかに復讐だった。[中略] 腹いせのために、N はさらにその先に行った。私はこの事件より前に、彼が『イーゴリ軍記』が本物であることについて疑いを口にするのを聞いたことがなかった……。いまや、J が真正説に熱狂的に固執しているのを見て、N は何とかそれに反駁するための論拠を探すようになった。私が……そのことをJ に言うと、彼はこう答えた——「真正説を攻撃しようものなら、粉碎されるだけさ……」N のJ との決裂は、手紙の形を取った。J はソ連に何度か旅行していて、N はそういった旅行にきっぱりと異議を唱えたのだ。彼はその手紙を書く前に私に電話をかけてきて、自分の決意を知らせ、穏やかに、もしよかったら、J とは別に、二人だけで『イーゴリ軍記』の仕事をやらないか、と提案した。そんなことは私にはできなかつ

²⁵ ヤコブソンとナボコフの対立を、翻訳論と冷戦期の政治という二つの視点から分析した論文としては、以下のものがよく論点を整理したものになっている。Brian James Baer, “Translation Theory and Cold War Politics,” in Brian James Baer, ed., *Context, Subtexts and Pretexts: Literary Translation in Eastern Europe and Russia* (Amsterdam and Philadelphia: John Benjamin Publishing Company), pp. 171-186.

た。²⁶

皮肉なことだが、ここで二人の「政治的」な立場の違いについて触れておかねばならない。皮肉というのは、ナボコフはもともと政治などには一切関わらないという立場を貫いていたし、ヤコブソンも学問的活動以外の脇道にそれるようなことは一切しない研究者だったからだ。もともとソ連に対して強く否定的なナボコフは、冷戦時代には——自分の非政治的な立場にある意味では反することだが——反ソ的言動を強め、1950年代の「赤狩り」の時代に——リベラルな大学人は無論、「赤狩り」には敵対的だったのに——コーネル大学に派遣されたFBI職員と仲良くなり、自分の息子をFBIに入れて、こういう仕事をさせられたら誇らしく思うだろう、とまで言っている。²⁷ それに対して、ヤコブソンはもともとロシア・アバンギャルドの未来派、特に詩人のマヤコフスキーと個人的にも親しく（それに対してナボコフは未来派全般に対して冷ややかだった）、第二次世界大戦後、学術的な目的の短期訪問とはいえ、何度かソ連を訪れていた。ナボコフのような強硬な「反ソ派」からすれば、「親ソ派」に見えてもおかしくない。しかし、シェフテルの言うように、ヤコブソンが「ソ連のスパイだ」というのは、単なる腹いせのためであって、何の現実的な根拠もないものだろうか。

実はヤコブソンの過去については、疑わしい点があったのではないかと憶測している研究者がいる。チャールズ・ロックは、ヤコブソンのロシア革命前後の経歴に着目し、ヤコブソンは自分のソビエト・コネクションを暴露することができる数少ないアメリカ在住の亡命ロシア人の一人としてナボコフを恐れる理由は十分あった、と指摘している。²⁸ ロックの指摘は少々短絡的ではないかと思うが、それにしても、ヤコブソンの若い頃の経歴にはあまりに不明な点が多い。ヤコブソンの言語学者としての生涯の軌跡を描き出した山中桂一もまた、革命前後のヤコブソンについて「かれは、この時代のことについてほとんど何も語っていない」「かれが、革命に対する政治的な態度を明らかにしたことは一度もない」「家庭環境や生い立ちについては、ほとんど何も知られていない」²⁹ などと当惑気味に繰り返し指摘している。ヤコブソンの父はモスクワ在住のユダヤ系実業家・化学者だったが、夫婦で1918年に亡命した。それなのに若きヤコブソンはなぜソ連に残ったのか、そして1920年にチェコに渡るまでソ連で何をしていたのか、よくわからないのである。

学生時代から革命直後の時期のヤコブソンについて、おそらくもっとも詳しい情報を提

²⁶ Diment, *Pniniad*, p. 40.

²⁷ Boyd, *Vladimir Nabokov*, p. 311.

²⁸ Charles Lock, "Transparent Things and Opaque Words," in Jane Grayson, Arnold McMillin, and Priscilla Meyer, eds., *Nabokov's World. Volume 1: The Shape of Nabokov's World* (Houndmills, Hampshire and New York: Palgrave, 2002), pp. 118-119.

²⁹ 山中桂一『ヤコブソンの言語科学 1 詩とことば』勁草書房、1989年、2頁、3頁、5頁。

供してくれるのは、インジフ・トマンという研究者だが、彼によれば、ヤコブソンは革命後しばらく教育人民委員部造形芸術部門（ИЗО）に所属していたが、1920年初頭には新たにエストニアに作られたソビエト使節団の広報部長に任命された。しかし、すぐにソ連に呼び戻され、1920年4月にはポーランドとの新しい国境についての交渉のためのガイドライン作成を任される。ところが5月にはポーランドとソ連の間に戦争が勃発し、この仕事も立ち消えになり、6月にはソビエト赤十字の代表団の一員としてプラハに行くことになった。周知のようにヤコブソンはチェコに行った後は、ナチの侵攻を逃れて1939年4月にプラハからベルリン経由でデンマークに脱出するまで、³⁰ ずっとチェコに留まることになった。そうだとすると1920年にエストニアに行き、それからプラハに行くといった「海外勤務」は、一種の「ソフトな亡命」の形だったのだろうか、とトマンは問いかける。³¹

ペトル・ゼンクル³²に宛てた1950年11月18日付のヤコブソンの手紙によれば、1917年から1918年にかけてヤコブソンはミリュコフ率いる立憲民主党（カデット）の学生会部の執行委員を務めており、ソビエトに留まり続けるのが次第に危険になってきたため、赤十字の一員としてプラハに出たのだという。しかし、トマンによれば、これはマッカーシズム時代のアメリカで書かれた手紙なので、額面通り受け取っていいかは疑問だという。当時のアメリカでは、ソ連とのコネクションがないことを強調する必要があったからである。ちなみに、ベンクト・ヤングフェルトがスウェーデンの移民局アーカイヴから掘り起こした警察調書によれば、1940年4月23日、セルナの警察で取り調べを受けたとき、ヤコブソンは「1918年に両親とともにモスクワを去って、プラハに行った」³³と証言している。これはもちろん事実ではないが、1920年までソ連に残っていたということは身の安全のために意図的に隠したのではないか。一方プラハからマヤコフスキーに宛てた1921年2月8日付の手紙を見ると、決してソ連から逃げ出そうとしている人間のようにではなく、むしろ革命精神に同調しているように見える。³⁴

³⁰ この脱出劇と、特に1940～41年にかけてのヤコブソンのスウェーデン滞在については、スウェーデンのロシア文学研究者ベンクト・ヤングフェルトによる論文が極めて興味深い。Bengt Jangfeldt, “Roman Jakobson in Sweden 1940-41,” in Françoise Gadet and Patrick Sériot, eds., *Jakobson entre l'Est et l'Ouest, 1915-1939: Un épisode de l'histoire de la culture européenne, Cahier de l'ILSL No. 9* (Lausanne: Université de Lausanne, 1997), pp. 149-157. 特に注目されるのは、ノルウェーからスウェーデンに逃げてきたヤコブソン夫婦について、国境近くの小村セルナ（Särna）の警察署で作成された調書（1940年4月24日付）が掲載されていることである。なお、ヤングフェルトの論文については、山中桂一先生にご教示いただいた。

³¹ Jindřich Toman, *The Magic of a Common Language: Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1995), pp. 38-39.

³² Petr Zenkl (1884-1975) はチェコの政治家。プラハ市長や、第二次世界大戦直後には副首長にもなったが、1948年アメリカに亡命、それ以後、自由チェコスロヴァキア協議会議長を務めた。

³³ Jangfeldt, “Roman Jakobson in Sweden 1940-41,” (前註25参照) p. 155.

³⁴ ゼンクル宛、マヤコフスキー宛の手紙の引用は、Toman, *The Magic of a Common Language*, pp. 39-40.

いまとなつては真相は解き明かしがたいのだが、常識的に考えて、ヤコブソンが革命後もしばらくソ連に残り、ボリシェヴィキ政権下で公式の職務を持っていたということからは、1920年に彼がプラハに行ったときも何らかの「使命」を帯びていた可能性があると思測することもできなくはない。また、上記ゼンクル宛の手紙で注目すべきことは、ヤコブソンが立憲民主党の活動家であった時期があると認めているということだ。ナボコフの父もまた立憲民主党の重要人物の一人で、二月革命後に臨時政府で一時的要職を務めたが、十月革命後、亡命せざるを得なくなった。その父が、1922年、ベルリンで立憲民主党の指導者ミリュコフをかばって凶弾に倒れたことはよく知られている。ナボコフはこの父を敬愛し、ロシア的なリベラリズム思想を受けついただと考えられる（この点については、デйна・ドラグノワユの『ウラジーミル・ナボコフとリベラリズムの詩学』³⁵が詳しい）。もしもナボコフがヤコブソンの立憲民主党への参加を知っていたとしたら、ヤコブソンのその後の「ソ連寄り」の姿勢は、ナボコフにとっては特に許しがたいものに思えたのではないか。自分たちがともに信じていたリベラリズムの価値観に対する裏切りとなるからである。

「世界で一番重要なこと」——結びに代えて

ヤコブソンとナボコフの確執をこのように見てきて、改めてこの関係が、どれほど多くの領域に関わっていたかと驚かされる。「象」の逸話や『イーゴリ軍記』のための共同作業の挫折といった具体的なことから、言語、芸術、政治的イデオロギー、国民的アイデンティティから愛国心まで。ナボコフがペテルブルグ風のロシア語を話す貴族出身者であったのに対し、ヤコブソンがモスクワ出身の、ユダヤ系実業家の息子であったという生い立ちの違いも、少なからず作用したに違いない。そして何よりも、二人とも知の巨人であっただけでなく、それぞれがそれぞれの流儀で魅力的だったため、かえって両立し難くなったのではないか、という感じがする。

対照的な二人ではあったが、一つ、共通している非凡な特徴があった。それは二人とも、大学の授業で学生たちを惹き付ける天才的な能力を持っていたということだ。ナボコフの講義の数々は、後に講義集の形で出版されていて、その魅力は今でも味わうことができる。³⁶ それに対して、ヤコブソンの授業が常に並外れて面白く、言語学にあまり関心を持たない

³⁵ Dana Dragunoiu, *Vladimir Nabokov and the Poetics of Liberalism* (Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 2011).

³⁶ 教師としてのナボコフの姿は、以下の解説で描き出すことを試みた。沼野充義「解説——動物学の教授には象を呼べ！——大学教師としてのナボコフ」ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフの文学講義』野島秀勝訳、河出文庫、2013年、409-429頁。

学生たちにも強烈な好奇心を燃え上がらせ、彼らを言語学の世界に巻き込んだことについては、ハーバードのホレス・G・ラント教授が同僚のドナルド・ファンガー教授の言葉として伝える、極めて印象的な証言がある。

すでに教授となったファンガーが、ヤコブソンと会話をしていたときのこと。ファンガーは文学研究者であって、言語学を専攻していたわけではないが、彼もまた学生時代にヤコブソンの「ロシア語動詞」の授業に出たことがあるらしい。その授業の面白さを思い出して、ファンガーは自分の知る限り、ヤコブソン先生は「生まれつき退屈な講義をすることができない」ように思える唯一の教師だと驚嘆の念を表したうえで、「どうしたら、そんなことができるんですか？」と尋ねた。それに対して、ヤコブソンはこう答えたという。「簡単なことだよ。教室に入っていくと、男子学生が隅っこで心配そうな顔をしている。車の修理代をどう工面しようかと悩んでいるんだろう。それから前のほうには、女子学生がいて、どうやら、今晚彼氏から電話がかかってくるかしらと、上の空の様子。それから、窓の外を眺めることに余念のない学生もいる。そこで私の仕事は何かと言えば、こういったすべての学生たちに、一時間の間だけ、信じさせることなんだ——10世紀に起こった鼻母音の非鼻母音化こそ、世界で一番重要なことなんだって！」³⁷ この言葉は、ヤコブソン追悼文集にラントが寄せた文章から引用したが、私自身ハーバードで古代教会スラヴ語の授業中にラント先生から直接聞いたことがあるのを覚えている。ただし、私が聞いたバージョンでは、「鼻母音の非鼻母音化」ではなく、「イェル (jers) の脱落」だった。とするならば、これもまた口承で少しずつ形を変えて伝わる、ヤコブソンをめぐるもう一つの「学園伝説」ではないか。

最後にごちゃごちゃした人間的な確執を忘れ、彼らの生み出した著作に立ち返るならば、ヤコブソンの *Selected Writings* 全9巻、ナボコフのシンポジウム社版著作集全10巻。どちらも質量ともに圧倒的であり、どちらも凡庸な人間では一生かかっても読解することさえかなわない（そのうえ彼らの *oeuvre* は、再発見された著作や新発見の手稿などによっていまだに拡張され続けている）。それぞれが書棚でしかるべき別々の場所を占めていれば、それで十分ではないかという気がする。

人間の生涯を簡潔に要約するのは、墓碑銘である。スイスのクララン墓地にあるナボコフの墓には、一言だけフランス語で ECRIVAIN（作家）と刻まれている。「ロシアの」とか、「アメリカの」といった形容詞も一切ない。それに対して、ヤコブソンはアメリカのケンブリッジ郊外にあるマウント・オーバン墓地に埋葬されたが、墓石に刻まれているのは、РУССКИЙ ФИЛОЛОГ（ロシアの言語・文学研究者）というロシア語だという。ヤコブソンを生前知っていた人たちは、彼は世界数十の言語を自由に操ったが、そのすべては

³⁷ *A Tribute to Roman Jakobson*, p. 77. 引用における太字強調部分は、原文ではイタリック。

ロシア語だった、などと言ったものだが、墓碑銘が示唆しているように、彼は類稀なポリグロットでありながら、確かに「ロシアの」フィロログとしての生き方を最後まで貫いた。語源的に「言葉を愛する者」を意味するフィロログがロシア語ではよく使われるごく基本的な単語でありながら、英語にもその他の西欧語にもほとんど翻訳不可能であるということも、最後に銘記しておこう。

On the Conflict between Roman Jakobson and Vladimir Nabokov: The Elephant, Igor', and the Soviet Agent

NUMANO Mitsuyoshi

This essay probes into the nature of the conflicts between linguist Roman Jakobson and novelist Vladimir Nabokov. To shed light on these matters, I will refer to Nabokov biographies written by Andrew Fields and Brian Boyd, draw upon recent studies on Nabokov and Jakobson by a range of scholars, such as Galya Diment, Dana Dragunoiu, Brian James Baer, Jindřich Toman and Charles Lock, and also touch on a few of my own memories. I hope to reconstruct the words Jakobson uttered when he spoke against Nabokov's candidacy for a professorship at Harvard.

This "elephant" incident inevitably led Nabokov to write a letter to Jakobson in which he announced that he would no longer collaborate with the linguist on the English-language edition of *The Song of Igor's Campaign*. Clearly, Nabokov was angry about Jakobson's actions. At the same time, there was an even more important factor behind the tension growing between the two. They had very different attitudes vis-à-vis the work in question. While Jakobson prized the work's authenticity above all else, the question of authenticity was secondary for Nabokov. In his mind, the work's artistic aspects were of critical importance.

According to Marc Szeftel's diary, Nabokov began calling Jakobson a "Soviet agent". While not exactly plausible, Nabokov's accusation had some logic to it. To begin with, Jakobson had traveled to the Soviet Union. Nabokov, on the other hand, never visited his homeland. Jakobson was also close friends with Mayakovsky, whom Nabokov never regarded highly. Moreover, how Jakobson passed the years around the time of the Russian Revolution was by and large unclear. It is uncertain whether his visit to Czechoslovakia with the Soviet Red Cross in 1920 was in fact a form of "soft emigration."

Examining these points of contention, we can get a better sense of what mattered most to these two legendary Russian emigres: language, art, ideology, national identity and patriotism.